

継手接続要領

継手についてのご注意

- 継手はフレキ管の原管外周面シール構造となっています。
- 継手は、投げたり、落下させたりしないでください。

警告

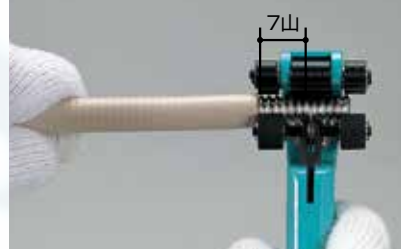
- 継手を誤って落下させた時は、各部品に損傷、異物の混入がないか確認してください。不具合発生の状態で施工すると、気密不良の原因となります。
- 継手の再使用は禁止です。気密不良の原因となります。

1 フレキ管の切断



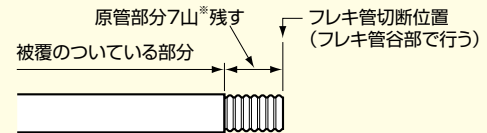
フレキ管を適当な長さにステンレス鋼専用のフレキカッターを用いて切断します。

3 原管の切断



フレキカッターで原管を7山^{*}残して谷部を切断します。

※6山も施工可能です。



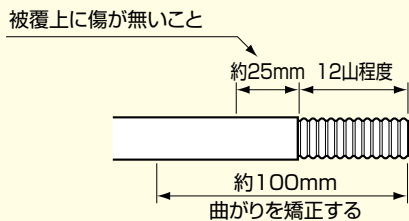
2 被覆の剥離



専用の被覆カッターを使用して、12山程度(目安)

8~20A : 約50mm
25A : 約70mm

フレキ管の先端の被覆を剥離します。



注意

剥ぎ取り前にフレキ管先端から約100mm部分の曲がりを矯正してください。曲がっていると切断不良や挿入不良の原因となります。

注意

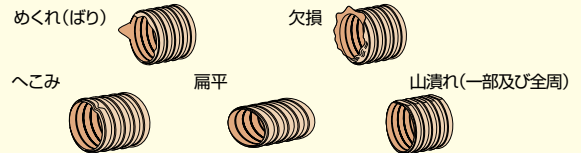
被覆の剥ぎ取りには、専用の被覆カッターを使用してください。他の工具の使用はフレキ管に損傷を与え、施工不良や気密不良などの施工不良の原因となります。

注意

剥ぎ取り部から約25mm以内の被覆上に傷がないこと、偏平していないこと、被覆が浮いていないかを確認してください。傷があると水密性が損なわれる可能性があります。また、フレキ管の山部と被覆の内面は通常密着していますが、被覆が浮いていると施工不良の原因となりますので、フレキ管を切り直してください。

警告

フレキ管谷部の一部が切れずに残った場合には、慎重に繰返し折るようにして切り離してください。フレキカッターは、切断時にフレキ管とフレキカッター本体が接触して損傷を与えないものを使用し、切断後は、切断面及びフレキ管先端から5山間に下図のようなめくれ(ぼり)、欠損、へこみ、扁平、山潰れなどの原管の変形や傷付きがないことを確認してください。切断面が悪い場合は、施工不良及び気密性能が保持できないため、切り直してください。



注意

剥ぎ取り部から25mm以内の被覆が浮いていないことを確認してください。被覆が浮いていると挿入不良の原因となりますので、フレキ管を切り直してください。

4 継手接続(ねじ付の場合)

継手をヘッダー、ガス栓などにねじ込んで接続する。

強制

他の部品と接続する管用テーパねじ部にはシーリング剤を使用してください。使用しない場合は、気密不良の原因となります。

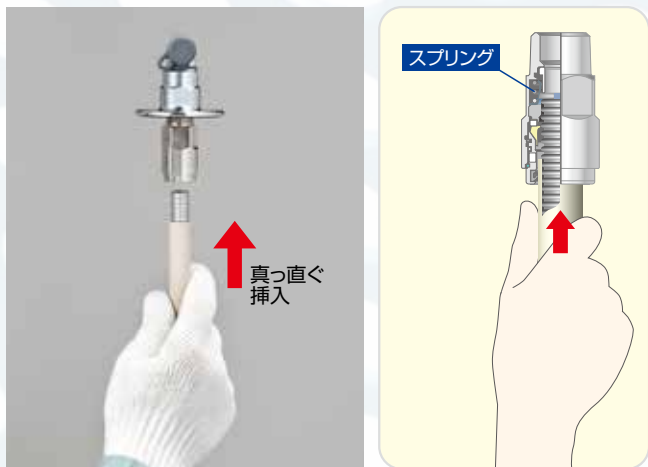
警告

接続は継手本体の六角部にスパナ又はフレキ管継手レンチ等を使用して締付けてください。パイプレンチは使用しないでください。またモンキレンチ又はモーターレンチを使用する場合は、継手六角部とレンチ開口幅にガタツキがなく隙間がなくなるように調整してください。ガタツキがあると継手本体が変形しフレキ管が接続できない恐れがあります。

注意

フレキ管を継手に挿入後に継手をねじ込む場合は、以下の事項を遵守ください。「フレキ管が真直ぐの状態であること」「フレキ管に引張りや曲げの力がかかっていないこと」「継手のねじ込み以上に回さないこと」。

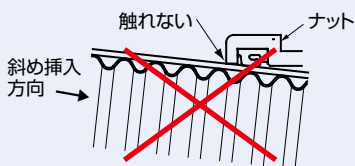
5 フレキ管の挿入



継手の奥に突きあたる(「コツン」という感触が手に伝わる)までフレキ管を真っ直ぐ挿入します。スプリングが作動する音、感触でフレキ管が適正な位置まで挿入されたことが確認できます。

⚠ 注意

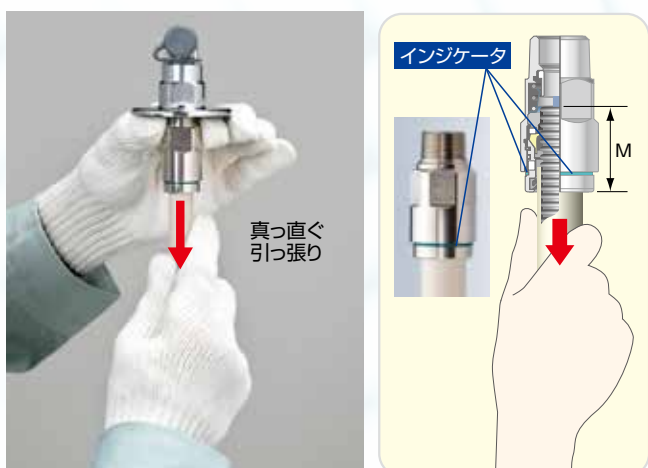
フレキ管が、ナット内面に触れないように管軸に対し真っ直ぐに挿入してください。過度の斜め挿入は、シール部を傷つける恐れがあります。



⚠ 警告

フレキ管長さに余裕がない状態や、テンションがかかった状態でフレキ管を継手に挿入しないでください。斜め挿入や挿入不足などの施工不良及び気密不良の原因となります。

6 フレキ管の接合確認



フレキ管を「カチッ」という感触のあるところまで、挿入時と同じくらいの力で真っ直ぐ引っ張り、インジケータが出ていることを確認します。

⚠ 強制

必ず管に引き抜き力を与え、インジケータが出ていることを確実に確認してください。フレキ管の挿入が不完全ですとフレキ管が抜けます。その場合はフレキ管の挿入不足のため改めてフレキ管の挿入作業からやり直してください。

⚠ 警告

- 接合確認の際、極端に斜めに引っ張らないでください。挿入不足の場合でもインジケータが誤って出る可能性があります。
- 接続空間が十分にない狭い場所など、フレキ管端部を真っ直ぐにして接続できないケースもあります。
- このときフレキ管が継手に対して軸線が合わない状態で管を挿入したり、接合確認したりすると、フレキ管が継手奥に当たる音又は感触が得られない、また、フレキ管の抜け出しの原因となります。そのような場合は、配管ルートを見直してください。
- もし、配管ルートの見直しが困難の場合は、事前に管を接続したあと継手をねじ込む方法、もしくは、⑥接合確認後のフレキ管挿入長さを管理する方法があります。この時のフレキ管挿入長さ(M)の目安は下記となります。

(単位:mm)

呼び	8A	10A	15A	20A	25A
接合確認後のフレキ管挿入長さ(M)の目安	32	32	33	36	50

⚠ 強制

- 継手にフレキ管を挿入後、継手近傍においてフレキ管を曲げる際、6頁記載の「最小曲げ半径R(内半径)」以上を順守してください。内半径以下で曲げると、気密不良の原因となります。
- ガス栓近くを除いて継手近傍5cm以内は曲げないようにしてください。

⚠ 警告

- インジケータ(継手分解用リングと兼用)は外さないでください。外しますと、ナットが抜けて気密不良の原因となります。
- ガスを通して(開栓)以降は、継手やフレキ管を回転させるなど外力を与えないでください。気密不良の原因となります。
- 燃焼器具取替時は継手を回転しないでください。また、継手は再使用を禁止します。気密不良の原因となります。

⚠ 注意

施工完了後はフレキ管を押し込まないでください。(分解時にフレキ管先端を変形させる恐れがあります。フレキ管を再使用する時は「③原管の切断」の作業手順に従い、フレキ管の変形部分を切断してください。)

7 漏れ検査

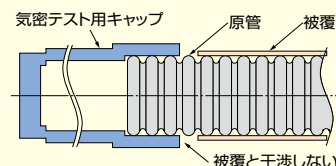
所定の漏れ検査を行ってください。

⚠ 注意

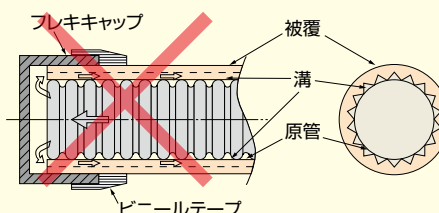
フレキ管を器具などに接続させていない状態で、本カタログ15頁に記載の気密テスト用キャップを使用するときは、気密テスト用キャップが被覆と干渉しない状態で、漏れ検査を行ってください。

下図に示す不具合例のように、フレキキャップを用い被覆外面をシールした状態で漏れ検査を行いますと、フレキ管の構造上、封入した気体が被覆内面と原管外面との間を通過し、継手側から外部へ流出しますので適切な漏れ検査はできません。

検査方法



不具合例



施工を行う場合には、製品と同梱の「ガス用ステンレス鋼フレキシブル管用継手プッシュインバクト接続要領」に記載された安全上の注意事項をよく読み、正しく接続してください。また、都市ガスに用いる場合は、所轄のガス事業者の定める配管指針に従って施工してください。